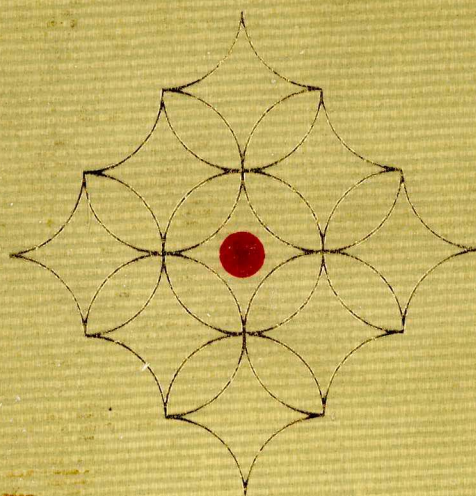




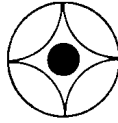
現代日本文學大系

85

大岡昇平集
三島由紀夫



筑摩書房



現代日本文學大系 85

昭和四十四年一月十五日

初版第一刷発行

大岡昇平・三島由紀夫集

著者

大岡昇平
三島由紀夫

発行者

竹之内静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

CS 10085

大岡昇平集 目次

卷頭写真
筆蹟

野火

花影

朝の歌

俘虜記

母

三島由紀夫集 目次

卷頭写真
筆蹟

仮面の告白

三

充

三六

一八五

二〇六

三九

獅子

二五五

怪物

三八

遠乗会

三八

真夏の死

三六

美神

三七

橋づくし

三〇

女方

三九

鹿鳴館

三〇

〔付録〕

戦前・戦中・戦後

大岡昇平
高見順
四九

大岡昇平

中村光夫
四六

私の遍歴時代

三島由紀夫
四七

三島由紀夫

埴谷雄高
四八

年譜

四三

大岡昇平集

日真花郭重

大正甲午

野 火

たとひわれ死のかげの谷を歩むとも

ダビデ

一 出 発

私は頬を打たれた。分隊長は早口に、ほぼ次のやうにいつた。

「馬鹿やろ。帰れつていはれて、黙つて帰つて来る奴があるか。帰るところがありませんか、がんばるんだよ。さうすりや病院でもないとかしてくれるんだ。中隊にやお前みてえな肺病やみを、飼つとく余裕はねえ。見ろ、兵隊はあらかた、食糧収集に出動してゐる。味方は苦戦だ。役に立たねえ兵隊を、飼つとく余裕はねえ。病院へ帰れ。入れてくんなくつたら、幾日でも坐り込むんだよ。まさかほとときもしねえだらう。どうでも入れてくんなくつたら——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんぢやねえぞ。それが今ちやお前のたつた一つの御奉公だ」

私は喋るにつれ濡れて来る相手の唇を見続けた。致命的な宣告を受けるのは私であるのに、何故彼がこれほど激昂しなければならぬかは不明であるが、多分声を高めると共に、感情をつのらせる軍人の習性によるものであらう。情況が悪化して以来、彼等が軍人のマスクの下に隠さねばならなかつた不安は、我々兵士に向つて爆発するのが常であつた。この時わが分隊長が専ら食糧を語つたのは、無論これが彼の最大の不安だつたからであらう。

いくら「坐り込ん」でも病院が食糧を持たない患者を入れてくれる

はずはなかつた。食糧は不足し、軍医と衛生兵は、患者のために受領した糧秣で喰ひ繼いでゐたからである。病院の前には、幾人かの、無駄に「坐り込ん」である人達がゐた。彼等もまたその本隊で「死ぬ」といはれてゐた。

十一月下旬レイテ島の西岸に上陸するとまもなく、私は輕い咯血をした。水際の対空戦闘と奥地への困難な行軍で、ルソン島に駐屯当時から不安を感じてゐた、以前の病氣が昂じたのである。私は五日分の食糧を与へられ、山中に開かれてゐた患者收容所へ送られた。血だらけの傷兵が碌々手当も受けずに、民家の床にごろごろしてゐる前で、軍医はまづ肺病なんかで、病院へ来る氣になつた私を怒鳴りつけたが、食糧を持つてゐるのを見ると、入院を許可してくれた。

三日後私は治癒を宣されて退院した。しかし中隊では治癒と認めない、五日分の食糧を持つて行つた以上、五日おいて貰へ、といつた。私は病院へ引き返した。あの食糧は五日分とはいへない、もう切れたと断られた。そして今朝私は投げ返されたボールのやうに、再び中隊へ戻つて来たのであるが、それはただ私の中隊でもまた「死ぬ」といふかどうかを、確かめたかつたからにすぎない。

「わかりました。田村一等兵はこれより直ちに病院に赴き、入院を許可されない場合は、自決いたします」

兵隊は一般に「わかる」と個人的判断を誇示することを、禁じられてゐたが、この時は見逃してくれた。

「よし、元氣で行け。何事も御国のためだ。最後まで帝国軍人らしく行動しろ」

「はい」

室内には窓際に汚い木箱を机にして、給与掛の曹長が何か書類を作つてゐた。我々の会話が聞えないやうに、黙つて背中を向けてゐたが、私が傍へ行つて申告すると、立ち上り、細い眼をさらに細くしていつた。

「よし、追ひ出すやうで氣の毒だが、分隊長の立場も考へてやらんと

いかん。犬死するなよ。糧秣をやるぞ。」

彼は室の隅の小さな芋の山から、いい加減に両手にしやくつて差し出した。カモテと呼ばれ、甘藷に似た比島の芋であつた。礼をいつて受け取り、雑糞へしまふ私の手は震へた。私の生命の維持が、私の属し、そのため私が生命を提供してゐる国家から保障される限度は、この六本の芋に尽きてゐた。この六といふ数字には、恐るべき数学的な正確さがあつた。

敬礼して廻れ右をすると、分隊長の声が追つて来た。

「隊長殿には申告せんでもいいぞ」

一瞬中隊長にいへば助かるかも知れないと思つたが、これは未練であつた。前線では将校は下士官の集団的意志に屈してゐた。隊長室はこの室からひと跨ぎの、渡廊下で繋いだ別棟にあつたが、入口を覆つたアンペラは静まり返つてゐた。

「申告しないでもいい」とは、私の場合が前日病院へ送り返された時、決着してゐたことを示してゐた。今日私が歸つて来たのは、まったく余計なことであつた。だからこれは純然たる分隊長の問題だつたわけである。

半ば朽ちた木の階段を下りると、木の間を透して落ちる陽が、地上に散り敷いてゐた。横手に彼岸花に似た褪紅色の花を交へた藪が連り、その向うの林の中で、十数人の兵士が防空壕を掘つてゐた。

円匙が足りないの、民家で見つけた破れ鍋や棒を動員して掘つて行く。敗残兵同様となつてこの山間の部落に隠れてゐる我々を、米軍はもう爆撃しにも来なかつたが、壕はとにかく我々の安全感のために必要であつた。それに我々にはほかにすることがなかつた。

林の陰で兵士達の顔はつべりと暗かつた。中に顔を挙げて私の方を見る者も、すぐ眼を外らし、下を向いて作業を続ける。

彼等は大部分内地から私と一緒に来た補充兵である。輸送船の退屈の中で、我々は奴隷の感傷で一致したが、古兵を交へた三ヶ月の駐屯生活の、こまごました日常の必要は、我々を再び一般社会におけると

同じエゴイストに返した。そしてそれはこの島に上陸して、情況が悪化すると共に、さらに真剣にならざるを得なかつた。

私が発病し、世話になるばかりで何も返すことが出来ないのが明らかになると、はつきりと冷たいものが我々の間に流れた。危険が到来せずその予感だけしかない場合、内攻する自己保存の本能は、人間を必要以上にエゴイストにする。私は彼等の既に知つてゐる私の運命を告げに行く気がしなかつた。彼等の追ひつめられた人間性を刺戟するのは、むしろ氣の毒である。

前方の路傍の木の根元に五六名の衛兵が屯してゐた。そしてこれが現在、中隊の位置に残つてゐる兵力の全部であつた。

タクロバン地区における敗勢を挽回するため、西海岸に揚陸された、諸兵団の一部であつたわが混成旅団は、水際で空襲され、兵力の半数以上を失つてゐた。重火器は揚陸する隙なく、船諸共沈んだ。しかし我々は最初の作戦通りブラウエン飛行場目指して、中央山脈を越える小径を行軍したが、山際で先行した別の兵団の敗兵に押し戻された。先頭は迫撃砲を持つ敵遊撃隊の活動によつて混乱に陥り、前進不可能だといふ。我々は止むを得ず南方に道なき山越えの進路を取つたが、途中三方から迫撃砲撃を受けて再び山麓まで下り、この辺一帯の谷間に分散露営して、なすところなくその日を送つてゐた。オルモック基地に派遣された連絡将校は進撃の命令を伝へたが、部隊長はそれを握りつぶしてゐると噂された。

オルモックを出発する時携行した十二日分の食糧は既になかつた。附近部落に住民が遺棄した玉蜀黍その他雑穀も、すぐ喰べつくした。

実数一ヶ小隊となつた中隊兵力の三分の一は、かはるがはる附近山野に出動して、土民の畠から芋やバナナを集めて来た。といふよりは喰ひ継ぎに出て行つた。四五日さうして喰べて来ると、交替に次の三分の一が出動する間、留守隊を賄ふだけの食糧を持つて歸つて来るのである。附近の部落に散在する部隊も、同様の手段で食糧をあさつてゐて、我々は屢々出先で畠の先取権を争ひ、出動の距離と日数は長くな

つた。

喀血して荷が担げない私は、この食糧収集に加はることが出来ない。私が死ねといはれたのは、このためである。

私は木の間を歩き衛兵達に近づいた。彼等は土に腰を下し、迎へるやうに私を見守つてゐた。衛兵司令に隊から棄てられたことを、繰り返すのもいやであつたが、彼等の無関心な同情に、惨めな姿を曝すのが一層苦痛であつた。待ち設けるやうな視線の中を歩いて、彼等の位置に達するまでの時間は長かつた。

衛兵司令の兵長はしかし私の形式的な申告を聞くと顔色を変へた。

満洲の設営隊から転属になつたこの色白の土木技師は、彼自身の不安を想起させられたのである。

「出て行くお前がいいか、残つた俺達がいいかわかつたもんぢやねえ。どうせ斬込みだからな」と呟いた。

「病院ぢや入れてくれないんだらう」と兵士の一人がいつた。

私は笑つて

「入れてくれなかつたら、入れてくれるまで頑張るのさ」

と分隊長にいはれたままを繰り返した。私は早くこの場面を切り上げるこゝろしか、考へてゐなかつた。

別れを告げる時、偶然顔を見合せた一人の兵士の顔は歪んでゐた。

私自身の歪んだ顔が、欠伸のやうに伝染したのかも知れない。私は出発した。

二 道

部落の中はアカシヤの大木が聳え、道をふさいで張り出した根を、自分の蔭で蔽つてゐた。住民の立ち退いた家々は戸を閉ざし、道に人はなかつた。敷きつめた火山砂礫が、褐色に光り、村をはづれて、陽光の溢れる緑の原野にまぎれ込んでゐた。

臍を抜かれたやうな絶望と共に、一種陰性の幸福感が身内に溢れ

るのを私は感じた。行く先がないといふはかない自由ではあるが、私はとにかく生涯の最後の幾日かを、軍人の思ふままではなく、私自身の思ふままに使ふことが出来るのである。

行く先は、心ではきまつてゐた。衛兵に告げた通り、病院へ行くのである。無駄な歎息を繰り返すためではない。あそこに「坐り込ん」である人達に会ふためである。会つてどうするあてもなかつたが、ただ私と同じく行き先のない彼等を、私はもう一度見たかつた。

野が展けた。正面は一軒で林に限られたが、右は木のない湿原が尻ひろがりに遠く退いた先に、この島の脊梁をなす火山性の中央山脈の山々が重なり、前山の一支脈は延びて、正面の林の後へ張り出して來てゐた。その伏した女の背中のやうな起伏が、次第に左へ低まり、一つの鼻でつきたところに、幅十間ばかりの急流が現はれ、丘はまたその対岸に高まつて、流れに沿つて下り、この風景の左側を囲つてゐた。その先に海があるはずであつた。

病院は正面の丘を越えて、約六杆の行程である。

午後の日は眩しかつた。嵐を孕むと見えるほど晴れて輝く空は、絶えずその一角を飛ぶ、敵機の爆音に充たされてゐた。その蜜蜂の羽音のやうな単調な唸りの間に、時々何処か附近の山々で散発する迫撃砲の音が混つた。開けた野に姿を曝すのは、敵機に狙はれる危険があつたが、この時の私には怖れる理由がなかつた。

私は手拭を帽の下に敷いて汗の流れるのを防ぎ、銃を吊革で肩にかけて、元気に歩いて行つた。熱はやはりあるらしかつたが、私は昔からこの熱に馴れてゐた。それはかつて青春の欲望を遂行するには、巧みに折り合はねばならぬ障害であつたと同じく、今は私の生涯の最後の時を勝手に生きるため、当然無視すべき一状態にすぎなかつた。病氣は治癒を望む理由のない場合何者でもない。

私は喉からこみ上げて来る痰を、道傍の草に吐きかけ吐きかけ歩いて行つた。私はその痰に含まれた日本の結核菌が、熱帯の陽にあぶられて死に絶えて行く様を、小気味よく思ひ浮べた。

林の入口で道は二つに分れてゐた。正面は丘を越えて真直に病院へ行く道、左は林の中に丘の鼻を廻つて、同じ谷間へ入る道である。丘越えの道が無論近いが、私は既に昨日から二度往復してその道に飽きてゐた。目的のない者の気紛れから、私は未知の林中の道を取る氣になつた。

林の中は暗く道は細かつた。樗や櫟に似た大木の聳える間を、名も知れぬ低い雑木が隙間なく埋め、葛や蔓を張りめぐらしてゐた。四季の別なく落ち続ける、熱帯の落葉が道に朽ち、柔らかな感触を靴裏に伝へた。静寂の中に、新しい落葉が、武蔵野の道のやうにかきこそと足許で鳴つた。私はうなだれて歩いて行つた。

奇怪な觀念がすぎた。この道は私が生れて初めて通る道であるにも拘らず、私は二度とこの道を通らないであらう、といふ觀念である。私は立ち止り、見廻した。

なんの変哲もなかつた。そこには私がその名称を知らないといふだけで、色々な点で故国の木に似た潤葉樹が（直立した幹と、開いた枝と、垂れた葉と）静まり返つてゐるだけであつた。それは私がここを通るずつと前から、私が来る来ないに拘らず、かうして立つてゐたであらうし、いつまでもこのままでゐるであらう。

これほど当然なことはなかつた。そして近く死ぬ私が、この比島の人知れぬ林中を再び通らないのも当然であつた。奇怪なのは、その確実な予定と、ここを初めて通るといふ事実が、一種の矛盾する聯関として、私に意識されたことである。

もつとも私は内地を出て以来、かういふ不条理な觀念や感覚に馴れてゐた。例へば輸送船が六月の南海を進んだ時、ぼんやり海を眺めてゐた私は、突然自分が夢の中のやうに、整然たる風景の中にあるのに氣がついた。

紺一色の海が拡がり、水平線がその水のヴォリュームを押し上げるやうに、正しい円を画いて取り巻いてゐる。海面からあまり離れてゐない一定の高さに、底部が確然たる一線をなしたお供餅のやうな雲が、

恐らくは相互に一定に距離を保つて浮んでゐる。そしてそれが船が一律の速度で進むにつれ、任意の視点を中心に、扇を廻すやうに移つて行く。舷側をすぎて行く規則正しい波の音と、単調なデージェルエンジンの音に伴奏されて、この規則正しい風景は、その時私に甚だ奇怪に思はれた。

偶然安定した気圧の下に、太陽が平均した熱を海面に注ぎ、絶えず一定量の水蒸気を蒸発させる以上、一定の位置に、同形の雲を生じるのになんの不思議はなかつた。そして機械によつて一定した速度で進む船から眺める以上、風景が一樣の転移を見せるのも当然であつた。私は即座にかう反省したにも拘らず、私の昂奮はなかなか去らなかつた。そこには一種快い苦痛のニエアンスがあつたのである。

もしこの時私が一遊覧客であつたならば、帰国後自国の陸に繋がれた哀れな友人に、大洋の奇観を語る場面を空想したらう。私の昂奮と苦痛は多分、敗戦と死の予感に冒されてゐた私が、その奇怪な経験を人に伝えることを、予想出来ないことに基いてゐたらう。

比島の林中の小径を再び通らないのが奇怪と感じられたのも、やはりこの時私が死を予感してゐたためであらう。我々はどんな辺鄙な日本の地方を行く時も、決してかういふ觀念には襲はれない。好む時にまた来る可能性が、意識下に仮定されてゐるためであらうか。してみれば我々の所謂生命感とは、今行ふところを無限に繰り返し得る予感にあるのではなからうか。

比島の熱帯の風物は私の感覚を快く揺つた。マニラ城外の柔らかな芝の感覚、スコールに洗はれた火焰樹の、眼が覚めるやうな朱の梢、原色の朝焼と夕焼、紫に翳る火山、白浪をめぐらした珊瑚礁、水際に陰を含む叢等々、すべて私の心を恍惚に近い歓喜の状態においた。かうして自然の中で絶えず増大して行く快感は、私の死が近づいた確実なしるしであると思はれた。

私は死の前にかうして生の氾濫を見せてくれた偶然に感謝した。これまでの私の半生に少しも満足してはゐなかつたが、実は私は運命に

恵まれてゐたのではなかつたか、といふ考へが閃いた。その時私を訪れた「運命」といふ言葉は、もし私が拒まないならば、容易に「神」とおき替へ得るものであつた。

明らかにかうした観念と感覚の混乱は、私が戦ふために海を越えて運ばれながら、私に少しも戦ふ意志がないため、意識と外界の均衡が破れた結果であつた。歩兵は自然を必要の一点から見なければならぬ職業である。土地の些細な凸凹も、彼にとつて弾丸から身を守る避難所を意味し、美しい緑の原野も、彼にはただ素速く越えねばならぬ危険な距離と映る。作戦の必要により、あなたこなた引き廻される、彼の眼に現はれる自然の雑多な様相は、彼にとつて、元来無意味なものである。この無意味さが彼の存在の支へであり、勇気の源泉である。もし臆病或ひは反省によつて、この無意味な統一が破れる時、その隙間から露呈するのは、生きる人間にとつてさらに無意味なものの、つまり死の予感であらう。

三 野 火

私はいつか歩き出してゐた。歩きながら、私は今襲はれた奇怪な観念を反芻してゐた。その無稽さを私は確信してゐたが、一種の秘密な喜びで、それに執着するものが、私の中にあつたのである。

道は林の中でうねつた丘裾の、線の自然をなぞつてゐた。緑の丘肌が木々のあはひに輝いた。林が途切れると、丘の夢幻的な緑を形づくる雑草が、道傍まで降りて来た。平らな稜線に、人に似た矮小な木が、ぼつんと立つてゐるのを、私は認めた。

林が尽き、乾いた砂利と砂に、疎らに草の生えた野へ出た。河原であつた、処々島のやうに点在した高みに、芒の群が遅い午後の光に銀色の穂を輝かせた。川はその向うに、一条の鋼鉄の線をなして横はり、風景を切つて遠だしく滑つてゐた。対岸は多摩の横山ほどの高さの丘陵が、やはり淡い草の緑を連ね、流れを遡つて右へ右へと退いて

行つた。そして遂に崖となつて河原へ落ち込んだ下に、一条の黒い煙が立ち上つてゐた。

煙は比島のこの季節では、収穫を終つた玉蜀黍の殻を焼く煙であるはずであつた。それは上陸以来、我々を取り巻く眼に見えない比島人の存在を示して、常に我々の地平を飾つてゐた。

歩哨はすべて地平に上がる煙の動向に注意すべきであつた。ゲリラの原始的な合図かも知れないからである。事実不要物を焚く必要から上がる煙であるか、それとも遠方の共謀者と信号する煙であるかを、煙の形から見分けるといふ困難な任務が、歩哨に課せられてゐた。

今見る川向うの煙は、明らかにその下で燃やされる物の大きな量と思はせる、幅広の盛んな煙であつた。黒いその下部に、私は時々橙色の焰の先が侵入するのを認めた。

しかし歩哨の習慣を身につけてゐた私に、煙は開いた河原に姿を現はすのを、躊躇はすのに十分であつた。それが単なる野火であるにせよ、ないにせよ、その下に燃焼物と共に比島人がゐるのは明瞭であつた。そして我々にとつて比島人はすべて實際は敵であつた。

私は初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した。しかし既に死に向つて出発してしまつた今、引き返すのはいやであつた。私は右手に丘を縁取る道なき林の中を迂回して、河原の道が前方で、また別の林に入つてゐるところまで、辿りつくことにした。

垂れ下がる下枝や、足にからむ蔓を、帯剣で切り払ひながら、私は進んだ。湿つた下草を踏む軍靴は、滑り易かつた。方向を失はないため、河原からの明るい反射が、羊歯類をエメラルドに光らす距離を、林縁と保つた。そこにも道があつた。辿つて林の奥に進むと、一軒の小屋があり、人がゐた。一人の比島人が眼を見開いて立つてゐた。

私は立ち止り、銃を構へ、素速くあたりへ眼を配つた。

「今日は、旦那」

と彼は媚を含んだ声でいつた。年の頃三十くらゐの顔色の悪い比島人である。色褪せた空色の半ズボンの下から、瘦せて汚れた足が出て

ゐる。住民が^{こゝろ}尽く逃亡したはずのこのあたりで、彼の存在がすでに怪しかった。

「今日は」

と私はおぼつかないピサヤ語で機械的に答へ、なほも周囲を検討した。静かであつた。小屋は一尺しか床上げがしてなく、前後は開け放されて、裏まで見通せた。刺戟性の異臭があたりに漂つてゐた。

「You are welcome」

と比島人は私の手にある銃を見ながら、卑屈に笑つた。その時私の口を突いて出たのは、私がそれまで思つてもみなかつた、次の言葉であつた。

「玉蜀黍はあるか」

男の顔は曇つたが、相変らず「ユー、アー、ウェルカム」を繰り返しながら、いざなふやうに先に立ち、小屋の裏へ廻つた。そこに土を掘つて火を仕掛け、大きな鉄鍋^{てつかく}をかけてあつた。中には黄色いどろどろの液体が泡を吹いてゐた。傍の土に黄色い山の芋がころがつてゐるところを見ると、それを煮つめてゐるらしい。異臭はその液体から昇つて来るのである。

別の小鍋に玉蜀黍の粒をほぐしたのが煮てあつた。彼はそれをすくつて汚ない^{どろどろ}琺瑯^{はろう}引きの皿に盛り、黒い大粒の塩を添へて薦めた。私はその時全然食欲がないのに気がついた。

「ここはお前の家か」

「いや、家は川向うだ」

と彼は答へ、木の間越しに川を指さした。臭い山の芋を煮て何にするかは不明であるが、どうやら彼は専らこの作業のため、ここへ来てゐるらしい。芋はこのあたりで採れるのであらう。「何にするのか」と訊いたが、彼の答へたピサヤ語は、私には理解出来なかつた。

私は皿を前にして、ぼんやり床に腰かけてゐた。男は絶えず張りつめたやうな笑ひを浮べ、私の顔を見詰めてゐた。

「喰べないのか」

私は首を振り、腰の雑囊にその玉蜀黍を開けながら、食欲がないのに、食物を要求した自分を嫌惡してゐた。

私は既にその男に対する警戒を解いてゐた。我々は一般に比島人の性格を見分けるほど、觀察の経験も根氣も持つてゐなかつたが、絶えず私の視線を迎へて微笑^{ほほえ}まうとしてゐる彼の顔は、單に圧制者に氣に入られようとする、人民の素朴な衝動のほか、何者も現はしてゐないやうに思はれた。それに、これは私が生涯の終りに見る、数少い人間の一人であるべきであつた。

彼は突然思ひついたといふ風に

「芋をやらうか」といつた。

「この芋は喰へまい」

「いや、ほかのがある。待つてくれ」

彼は立ち上り、林の奥へ歩いて行つた。私はぼんやりそのあとを見送つてゐた。彼は振り向きもせず、ずんずん歩いて、やがて横手の窪^{くぼ}地に降りて、見えなくなつた。

私は改めて荒れはてた小屋の内部を見廻した。汚れた床板は処々はがれ、竹の柱は傾き、あらはな板壁にやもりが匍^はつてゐた。さういふがらんとした小屋の内部は、必要以上に生活を飾らうとしない、比島の農民の投げやりな営みが現はれてゐた。

(この男達の間にまじつて、まだ生きられるかも知れない) と私は思つた。

男はなかなか帰らなかつた。私は不安になつた。立ち上つた時の彼の素速い動作が思ひ出された。私は林の奥で、彼の消えたあたりまで行つて見た。木々がしんと静まり返つてゐるばかりであつた。(逃げたな)と思ふと怒りがこみ上げて来た。急いで林の縁まで出て見ると、果して遠く川の方へ転がるやうに走つて行く後姿が見えた。

振り返つて私の姿を認めると、拳を威嚇するやうに頭の上で振り、それからまた駈けて行つた。その距離は到底^{そこ}の届きさうもない、届いても当りさうもない距離である。彼の姿はやがて輝^{きら}く芒^{すすき}に隠れた。

私は苦笑した。マニラで比島人の無力な憎悪の眼を見て以来、彼等に友情を求めるのがいかに無益であるか、私はよく知つてゐたはずである。私は小屋に帰り、山の芋を煮た鍋を蹴返して、その場を去つた。彼が逃げた以上、ここに止るのは危険である。

私は大胆に開けた河原に、自分の姿を現はした。彼が川向うまで逃げて行つたところを見れば、この地点は今では安全なのである。それはこの附近に彼が救ひを求むべき人のゐないことを意味した。少なくとも彼が川向うの仲間を連れて、引き返して来るまでに、ここを去ればよい。

私は足早に砂利を踏んで河原を横切り、前方の林の入口でもとの道に入つた。この林の木は小さく幹は細かつた。蟻塚が道傍にうづ高くつもり、蟻が吹き出すやうに溢れてゐた。私は慎重に前方を警戒しながら進んだ。いかに推理によつて安全を確信してゐたとはいへ、私の恐怖にとつては、逃げた男はこの道に比島人のゐる可能性だつたのである。警戒は私から瞑想を奪つた。

林が切れた。川向うには依然として野火が見えた。いつかそれは二つになつてゐた。遠く、人が向うむきに蹲まつた形に孤立した丘の頂上からも、一条の煙が上つてゐた。

麓の野火は太く真直ぐにあがつたが、丘の上の野火は少し昇ると、空の高い所だけに吹く風を示して倒れ、先は帯のやうにかすれてゐた。麓の煙が空気の重さと争ふやうに、早く勢込めて騰るのに対し、丘の煙は細く高く、誇らかに騰つて、空の風と戯れるやうに、揺れて靡いて流れてゐた。この氣象学的常識に反した、異なる形の煙の一つの風景の中の共存は、奇妙な感覚を与へた。

丘の煙は恐らく牧草を焼く火であらうが、我々の所謂「狼煙」にかなり似てゐた。しかしなんの合図であらう。

私は焦立つた。右手の丘はますます迂回されつつあつた。女の背のやうな優美な側面は、いつか意外に厳しく狭い正面に変わり、三角の頂上から、両足をふんばつたやうに、二つの小尾根を左右に投げ落して

ゐた。そしてそのあはひの小さな窪みに、懸掛椅子の形の玄武岩を支へてゐた。先の方の尾根を廻れば、病院のある谷間へ出るかも知れない。私は足を早めた。

また林に入つた。中で道は二つに分れてゐた。左は川沿ひに遡る道、右が丘に添ふ道らしい。右へ取つて少し行くと林が尽き、広い草原が広がつた。そしてそこに私はまた野火を見た。

川の側は林が続き、川と一緒に左へ左へとそれて行つてゐた。前は一軒ばかり草原が砂丘のやうに、ゆるやかに起伏した涯に、岩を露出した別の丘が、屏風のやうに立ちふさがつてゐた。そして私とその丘との中央に、草が半町ほどの幅で燃えてゐた。人はゐなかつた。

私はその煙を眺めて立ち尽した。

私の行く先々に、私が行くために、野火が起るといふことはあり得なかつた。一兵士たる私の位置と、野火を起すといふ作業の社会性を比べてみれば、それは明らかであつた。私は孤独な歩行者として選んだコースの偶然によつて、順々に見たにすぎない。

私の不安はやはり内地を出て以来の、奇妙な感覚の混乱に属してゐた。不安の唯一の現実的根拠は、野火のあるところには人がゐるといふことだけであつたが、しかしこの一般的な因果関係は、私のこの時の不安の原因として十分ではなかつた。現に草原の野火の下には人はゐない。原因は私個人に起つた事件の系列にあつた。私の見た野火の数にあつた。

そして私がかうして私の個人的な感覚に悩まされるのは、恐らく私があまり自分に気を取られすぎるからであらう。

私は魔法の解除を求めて、病院のある部落を地平に探した。前に広がる草原の広さから見て、大体これを目的の谷間の一部と考へることが出来たからである。そして私は遙か右手、岩山の麓に、寄り合ふやうに固つてゐる、見馴れた数軒の家を見つけることが出来た。

あそこにはとにかく同胞がゐる。この時私にはこの観念のはかばかかつた。

道は燃え続ける野火の中を通つてゐたが、私はそれを越えて行くことが出来なかつた。道をはづれ、肩ほどある蘆を分けて、真直に部落を目指して進んだ。

しかし私の眼は煙から離れなかつた。日は傾き、いつか風が出てゐた。煙は匍つて草を蔽ひ、時々綿のやうにちぎれて揚つて、川を縁取る林の方へ飛んで行つた。

見渡す草原に人影はなかつた。誰がこの火をつけたのだらう。これは依然として私が目前の事実からは解決出来ない疑問であつた。

四 座せる者等

病院の附近は、部落民の開墾した玉蜀黍畑が草原を切り取り、収穫を終へたあらはな畦が、前面の丘裾まで続いてゐた。丘の稜線は、中隊の側から見るのと同じ柔和な曲線を描いてゐるが、暗緑色の雑木が、乱雑に頂上近くまで匍ひ上り、処々赭土が露出して、なんとなく荒れ果てた裏側の感じを与へてゐた。

病院は民家を利用したものであつた。部落を構成する三棟の小屋の内、一棟が医務室、二棟が病棟に充てられ、軍医二人衛生兵七人が約五十名の患者を見てゐた。あらゆる物が不足してゐた。薬は与へられず、繃帯は替へられなかつた。病院はもと海岸の或る町に開かれてゐた療養所が、作戦の進行と共に移動したものであるが、その時連行した約三十名の独歩患者の外は、食糧を中隊から携行する者しか受け付けなかつた。

軍医達は患者を追ひ出して食糧をセーヴすることしか考へてゐなかつた。少しでも下痢すると、食事が全然与へられなかつたので、患者は無理しても退院して行つた。所在不明の原隊を追求するために、一食分の食糧が出発に際し与へられた。

二町ばかりさまよひ出て、路傍に倒れてゐる者がゐた。二三日彼等の姿は位置を変へて、遠く木の下、林の縁などに望まれたが、やがて

何処かへ消えてしまつた。

動けない、或ひは動かうと欲しない者、つまり「坐り込ん」でゐる者等は、病院から谷間を少し奥へ入つた、林の縁にころがつてゐた。彼等の数は次第に増えて行つた。

私は疲れてゐた。刈り取られた玉蜀黍の切株の固い畦を渡つて、さういふ兵等のかたまつてゐるところに辿りつくと、黙つて腰を下し、水筒の水を飲んだ。痺れるやうな、荒涼たる感情が私の心を領してゐた。それは一部は私の肉体の疲れの、一部は今通つて来た大きな草原の、孤独の効果らしかつた。

原は広く、目指す病院の屋根はなかなか近くならなかつた。それは波立つ蘆の彼方に、手に取るやうに見えながら、私を取り巻く原の広さを思はせて、いつまでもちんまりと遠く、行く手に控へてゐた。風は絶えず颯々と響を立てて耳許を過ぎ、また私の占めてゐない広い空間を渡つて行くらしかつた。草は圧へられたやうに、一斉に頭を風下に倒して、動かなかつた……

「また帰つて来たのか」

と声がかかつた。振り返ると顔馴染の安田といふ中年の病兵の、表情のない顔があつた。熱帯潰瘍で片足が棍棒のやうにふくれ上つてゐた。向脛にある一つの潰瘍は、塩煎餅の大きさに拡がり、真中に飯粒ほどに骨が見えてゐた。彼はそこに比島人の療法に従つて、刺戟性の匂ひのする植物の葉をはり、上にブリキの小片をあてて、布で縛つてゐた。

「さうさ、やつぱり中隊ぢや入れてくれなかつた」

「でも、ここへ来たつてしやうがあるめえに」

私は黙つた。お前達の仲間に入れて貰ひに来たのさ、といふ言葉は喉でつかへた。中隊を出る時彼等に対して持つてゐた、或ひは持つてゐたと思つてゐた興味は、二時間の孤独な散歩の間に必要と變つたのを私は知つてゐた。だから私はそれを彼等にいひたくなかつたのである。

「行くところがないからさ」

と私は単に一般的事実を指摘するに止めた。

私は改めて周囲のわが絶望の同僚を数へた。我々は八人であつた。朝私が出た時にゐた六人から一人が去り、二人が新しく到着してゐた。我々の中で実際に動けないのは、二三日前衛生兵に抗つて追ひ出された、若いマリア患者だけであつた。あとは下痢、脚氣、熱帶潰瘍、弾創等々、或ひはそのいくつかを兼ねた病兵であるが、正確にいつてここにゐなければならぬといふことはなかつた。

彼等は要するに私同様、敗北した軍隊から弾じき出された不要物であつた。そして彼等を收容すべき救護施設もまた、敗軍の必要からその能力がないことが判明すると、彼等にももう行く所がなかつた。彼等は結局かうして、彼等がかつて「兵士」たりし時の、最終の空想上の拠り所であつた、この避難所の周辺を彷徨するはかはなかつたのである。

私が正式の患者としてこの病院で暮した間、私は彼等の様子を注意してゐた。私もまたやがて彼等の仲間に入るかも知れない、と考へる理由があつたからである。

小屋から見ると彼等は林縁の汚点のやうに見えた。思ひ思ひの恰好で横はり、時々立ち上つて無意味にのろのろと動いた。人間よりは動物に近かつた。しかも当惑のため生存の様式を失つた、例へば飼ひ主を離れた家畜のやうに見えた。

しかし今その一員として彼等の間に入つて、私は彼等が意外に平靜なのに驚いた。内に含むところあるらしい彼等の表情からみて、彼等が一人一人異つた個人的必要を持ち、またそれに対処する心を持つてゐるのは、明らかであつた。そして一見無意味に見える彼等の動作にも、それぞれ意味があつたのである。

例へば私が着いて暫くすると、少々離れたところに寝てゐた彼等の一人は立ち上り、真直に私の前まで来た。そして「おい、糶米いくち持つてゐる」と訊いた。

彼は下痢患者らしく怖ろしいほど瘦せて、私の返事を待つ間も、じつと立つてゐられないらしく、体をふらふら振つてゐた。そして芋六本といふ私の答を聞くと、満足気に諾いて、のろのろと自分の席へ歸つて行つた。恐らくここにゐる人々の持つ食物の量を知つておくのが、何か私の知らない理由によつて、彼には必要だつたのであらう。

「はい、六本ありや豪勢だ。お前の中隊は氣前がいい。俺んとは二本しか寄越さねえ。それが今ちや一本よ」

と傍から別の兵士がいひ、その一本をわざとポケットから出して見せた。彼は今日私のゐない間に、到着した若い病兵で、足首の弾創に蛆を湧かしてゐた。

我々の状態では自分の持つ食糧の少なさを誇示するのは微妙な問題であつた。みな黙つてゐた。彼は氣配を察していつた。

「ふゝ、心配するな。誰もくれつていやしねえ。今夜、あそこから掻き払つて来てやらあ」

といつて、医務室の方を睨んだ。

しかし退屈した彼等の会話は、やはり絶望に関するものであつた。

「あゝあ、俺達はどうなるのかなあ」

と一人の兵士がラジオ・ドラマの口調でいつた。彼は最初私に話し掛けた安田と、同じ中隊に属する若い兵士で、栄養不良と脚氣でむくんだ大きな顔が、平たい胸の上に載つてゐた。

「どうなるものか。死ぬだけよ——どうせこの島へ上つちや助からねえんだから、今更くやむこたねえさ」と芋一本の兵士が嘲つた。

「落下傘部隊が降りるつてぢやないか」

「へん、お前この島へ来てから友軍機一機だつて見たことあるか。日が暮れてから蝙蝠みたいに、バタバタやつて来るだけぢやないか。それもこの頃ぢやさつぱり聞かねえ。米さんの落下傘部隊を待つた方が早さうだぜ。もつとも奴等はそんな面倒なことをしねえで、さつさと船で上つて来るだらうがね」

「さうも行くめえ。西海岸は何ていつたつて友軍のものだ」

「どうかね。何とかいつてるうちに、この辺にもどつと上つて来さうな気がするな——聞きねえ。オルモックがまた遠距離砲撃を喰つてるぜ」

北の方の空を遠雷のやうな砲撃が渡り始めてゐた。それは我々が四方に聞く乾いた迫撃砲の音とは違つた、地響を伴ふ鈍い音で、我々が背を向けてゐる岩山の後を、広い幅で蔽つて鳴り、谷々に飢しつ、次第に南へ移つて行つた。

「二十五サンチだ」

と誰かが指摘した。それは我々が上陸した頃も、朝夕きまつて一時間づつ、東海岸の米軍の砲兵陣地が、中央山脈を越して送つて来た榴弾であつた。

みな黙つて、暫く砲声に耳を傾けてゐるらしかつた。

「なんだな」と新しい兵士は相変らず嘲るやうにいつた。「いつそ米さんが来てくれた方がいいかも知れねえな。俺達はどうせ中隊からおつぱり出されたんだから、無理に戦争することあねえわけだ。一括げに俘虜にしてくれるといいな」

「殺されるだらう」と別の兵士が遠くから答へた。

「殺すもんか。あつちがや俘虜になるな名譽だつていふぜ。よくもそこまで奮闘したつてね。コーン・ビーフが腹一杯喰へらあ」

「よせ。貴様それでも日本人か」

と声がした。マラリアの若い兵士が起ち上つてゐた。頬が赤く眼が血走つてゐた。

相手は笑ひを頬に強張らして、じつと前方を見詰めてゐた。マラリアの兵士は何かいひつものらうとしたが、喉を鳴らしただけで草の中へ倒れた。

五 紫

日は暮れて来た。空は夕焼して赤い色が天頂を越え、東の方中央山

脈の群峰を雑色に染めてゐた。地上は草のあはひまでも紫の影に満ち、陽の熱の名残と、土と、水蒸気とから生れる、甘ずっぱい匂ひがあたりを漂つてゐた。遙か川向うの丘の上には、芋虫が立ち上つたやうな巻雲が夥しく並んで、これも真紅に染つてゐた。

見渡す野には野火はいつか衰へ、薄い煙が湯気のやうに、一面に騰つてゐるだけになつた。風はいつか落ちてゐた。

十間ばかり離れた病院の小屋では食事の時間になつたとみえ、飯盒を下げた衛生兵が忙がしく出入りし出した。四十歳ぐらゐの徴用らしい軍医が、小屋の前に立つて、暫く夕焼した空を眺めてゐたが、やがて「あーあ」と深く溜息して、小屋に入つてしまつた。戸口で彼はちらと我々の方を振り向いた。

小屋では物音がしてゐたが、我々の林の中は静かであつた。

「どれ、俺達も飯にするか」

といつて安田は立ち上り、マラリアの兵士の傍へ寄つた。

「おい、芋まだあつたら出しな、一緒にふかしてやるぜ」

病兵は薄眼をあけたが、首を振つて向うへ寝返つた。喰ひたくないといふのか、持つてゐないといふのか、明瞭ではない。

安田は木の枝の杖をつき、林の奥へ入つて行つた。そこに彼の籠があると思える。その後姿は「病人のほかは知らねえぞ」とはつきりいつてゐた。

芋一本の若い兵士は憎々しげにあとを見送つてゐた。

「ちえつ、ちやつかりしてやがら、この忙しい中にふかしたりやがつて、あの野郎。どこで仕入れやがつたか、しこたま煙草の葉を腹へ巻いてやがる。さつきも医務室へ行つて、芋と取り替へて来やがつたさつきと隊へ帰ればいいのに、結構ここで商売してやがるんだ」

「大きなお世話だ。義しいか」と安田と同じ中隊の若い兵士がいつた。

「へん、やにおやぢの肩を持ちやがつて、お前芋半分でも彼奴から貰ふのか」

相手は黙つた。